

の畑や朽ちかけた茅屋根と、山腹を無惨にえぐった地すべり跡と、そして今にも泣きだしそうな空模様とが、我々にこの村の抱える問題の大きさを強く印象づけた。

18日も19日も雨だった。戸隠村の中社、宝光社でそれぞれ聞き取り調査を行なう。戸隠村は戸隠神社を中心に発達した村で、神社の威力があちこちに残存していることに驚かされた。特に旅館の経営はかつての神官（社中と言う）の家系の者にしか許されぬという鉄則が、戸隠村全体の旅館の数を昔から1件も増加させていないことは、この村における戸隠神社の位置を物語っているとさえよう。ただし今はやりの民宿はスキー場の完備に伴いこれと関係なく増えている様である。

翌20日はやっと晴れ。飯縄山に登る。正確に言うと飯縄山中腹まで登る。ということになる。眼下に戸隠から鬼無里、戸隠山、荒倉山、そして遠く北アルプス連山を望み、少々人間臭さが恋しくなってきた我々も、北信濃の初秋の一日を満喫し、巡検最後の日を終えた安堵感につつまれた。

（浅海・斎藤先生指導 3年 牛山喜美子）

上高地巡検（6月28～30日）

第1日は降ったりやんだりするぐずついた天気の中を、京大防災研を訪ねて焼岳土石流についてのお話を聞いた後、地形、地質、植生を見ながら大正池、田代池を通して河童橋の近くまで行った。土石流は日本国中どこでも起るが、焼岳では毎年数回は起り頻度が高い。土石流の恐しさについては、私の家のある神戸市灘区の六甲山のふもとでも梅雨末期の集中豪雨の時に時々起るので何度か実際に見たことがあるが、土石流の正体について少しなりとも知識をもてたことは今回の巡検の収穫であった。土石流についての地味で根気のいる研究が続けられていることや、ネット形式のダムなどの新しい試みが行なわれていることも、今回の巡検で初めて知った。第2日は晴天に恵まれて、上高地から上々堀沢にそって登り中尾峠を越えて中尾に出た。この日の収穫は何と言っても今までに授業で習ったことを自分の目で確認できたということである。上高地側の土石流扇状地、中尾側の堆積段丘がはっきり見られたこと、古成層と焼岳火山岩を識別できたこと（上高地にも中尾の段丘堆積物にも見られた）。また山地のいろいろな植生及びこれが亜高山帯と山地帯とでは植生が異なること（植物地理の時間に、欧米では不明瞭な亜高山帯が日本では明瞭であると習ったばかりである）などである。また旅館の御主人から、中尾の今昔についてのお話もうかがった。中尾は以前は交通の便の大変に悪い、農業を主体とし猟もする山村であったが、温泉が出てから農業をやめて旅館を経営するようになったところが多いとのことである。第3日も晴天に恵まれ、京大防災研を訪ねてお話をうかがった後、蒲田川の支流にそって歩いた。中尾側と上高地側とではずいぶん景観が異なり、上高地側では上々堀沢がごつごつした大きな岩だらけであるのに対し、中尾側では川岸には小さな（上高地側に比べて）石が堆積していて上高地よりも古い時代に土石流が起ったことがわかる。

（式先生指導 4年 石上まり）